

『南洲翁遺訓』と庄内南洲神社

— 歴史を訪ねる旅 (8) —

下土橋 渡



鹿兒島県内に生まれ育ち、鹿兒島市内にある銅像や城山の洞窟、終焉の地なども見て知っていて、西郷隆盛という名は子供の頃からたいへん馴染み深いものでした。鹿兒島県人にとっていわゆる『おいどんが西郷^{せご}どん』というわけなのですが、恥ずかしながら、西郷隆盛の言葉をまとめた『南洲翁遺訓』という一冊の本があり、明治維新から一五〇年を経た現在でも自費出版され、全国に配布され続けていること、しかも、その本を出版し配布しているのが鹿兒島の人たちではなく、山形県酒田市にある『庄内南洲会』の人たちだとい

うことを知ったのは、五〇歳を過ぎてからのことでした。そして、酒田市に南洲神社があることも驚きでした。

庄内藩（今でいう山形県鶴岡市、酒田市）の藩主や藩士たちは、戊辰戦争^{ぼしん}の戦後処理で西郷隆盛の下した処置が温情ある極めて寛大ものだったことに感じ入り、西郷に教えを請うようになり、やがてその教えを一冊の本に編集して出版し、全国に配り歩き始めたのでした。

『南洲翁遺訓』の地に行ってみよう。その憧憬の地、山形県庄内をはじめを訪ねたのは二〇一〇年三月のことでした。

一、戊辰戦争

庄内藩主酒井家は、徳川幕府の三河以来の譜代の名門で、酒井家にとって徳川家は長い間恩を受けた主家にあたります。そのため、慶応三年（一八六七年）、幕府の命によって江

戸薩摩藩邸を焼き打ちし、その後の戊辰戦争では、東北諸藩とともに官軍に対して最後まで頑強に抵抗しました。しかし、西郷の率いる官軍の前に東北諸藩は次々に落ち、明治元年（一八六八年）九月二十六日庄内藩も大勢を察してついに恭順、そのとき庄内藩の降伏の申し出を受けたのは新政府軍参謀・黒田清隆でした。鶴岡市役所の前にかつて庄内藩の藩校だった致道館ちどうくわんがあります。現在は、表御門、聖廟、講堂、御居間などが残っており、国指定史跡として一般公開されています。この致道館の奥まったところに、藩主が昇校の際に御入りになった御居間という部屋があって、庄内藩は、明治元年黒田清隆をこの部屋に迎え入れました。

新政府軍に最後まで執拗に抵抗した藩でしたから、庄内藩の藩主や藩士らは嚴重な処罰が下るものと覚悟していました。ところが、

黒田から告げられたのは案に相違して極めて寛大ものでした。十一代藩主・酒井忠篤は謹慎を命じられ、新政府に反逆したとして改易に処せられたものの、弟の忠玉が藩主となり、十七万石から十二万石に減封された上で庄内藩は存続を許されました。ともに列藩同盟の盟主であった会津藩が解体と流刑となったのとは対照的に、庄内藩は軽い処分です。

二、『南洲翁遺訓』

庄内藩に対するこの寛大な処置のすべては実は、戦況視察のために来庄した西郷隆盛が予め黒田参謀に指示していたものでした。のちにこのことを知った庄内の人々は西郷の大徳に心から敬慕することになります。

明治二年に罪を許された酒井忠篤公は、明治三年（一八七〇年）十一月、藩士七十余名と共に遠路鹿児島に赴き、約半年間西郷を始



致道館（山形県鶴岡市）の扁額『敬天愛人』（昭和2年3月、旧庄内藩主酒井家16代・酒井忠良書）



御居間（致道館） 藩主が昇校の際に御入りになった部屋。戊辰戦争で降伏した庄内藩が官軍参謀黒田清隆を迎えて謝罪したゆかりの部屋です。

めとして篠原國幹、桐野利秋、村田新八等の指導を受けました。

庄内の俊傑の士、旧庄内藩中老・菅実秀すげねひで(臥牛)翁が初めて西郷と面談したのは明治四年四月頃のことでした。庄内の人々は、西郷が東京にいる時はもちろん、鹿児島に引き上げた後は、遠く鹿児島まで一ヶ月余の日時を費やして教えを受けに行きました。教えを受けた人々はその教えを丹念に筆記して庄内に持



『南洲翁遺訓』(財) 荘内南洲会
平成16年4月1日第3版発行

ち帰り、それを待つていた人々はまたそれを書写して、自分の心のよりどころとして学びました。これらの書写本が後日『南洲翁遺訓』編纂の資料となりました。

明治十年(一八七七年)九月二十四日朝、西郷隆盛が城山の下、岩崎谷で没したことを知った庄内の人たちの悲しみは言語に絶するものでした。

明治二十二年(一八八九年)二月十一日、大日本帝国憲法発布に伴う大赦で西郷の賊名が除かれ、加えて正三位が追贈されました。歓喜にわいた庄内の人々が、今こそ西郷の偉大な仁徳とその眞精神を天下に示し後世に伝える時と考えて着手したのが『南洲翁遺訓』の刊行でした。

明治二十三年(一八九〇年)一月に刊行されるやいなや、酒井忠篤公は同年四月に、伊藤孝継、田口正次を、東京を中心に、三矢藤

太郎、朝岡良高は中国地方から九州に、富田利騰、石川静正は北陸から北海道にと、全国の心ある人々に配布させました。文字通り風呂敷を背負って、全国を行脚しての弘布でした。(以上、『南洲翁遺訓』(第三版)を参考)

『南洲翁遺訓』は遺訓四十一条、追加の二条、その他の問答と補遺から成ります。

著者が小学生だった昭和三〇年(一九五五年)代、小学校の卒業記念に、身の丈の二倍以上もある孟宗竹に、先人の有名な言葉などを彫り込んだものをつくるのが流行っていました。著者が彫り込んだのは、『人を相手にせず、天を相手にせよ。』という言葉でした。小学生の分際で、よくも『人を相手にせず』云々などと、その制作作品を目にするたびに大いに恐縮したのですが、実はこの言葉は『南洲翁遺訓』の第二十五条に出てくる言葉だったのです。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己を尽くし人を咎(とが)めず、我が誠の足らざるを尋(たず)ぬべし。

三、庄内南洲会と南洲神社

(一)西郷南洲先生の大徳の顕揚、(二)『南洲翁遺訓』の講究と弘布、(三)社会風教作興への貢献を願いとして、昭和五十年(一九七五年)九月、財団法人庄内南洲会が設立されました。

そして、翌年の昭和五十一年六月に酒田市飯盛山下に南洲神社が創建されました。伊勢神宮から用材の払い下げを受けた総檜造り、銅板葺の神殿となっています。『南洲翁遺訓』(第三版)に『東北の一角、此の酒田の地に、西郷・菅岡先生の御霊を鎮座し、朝夕拝する夢が実現した事は、言語に盡くせぬ感激である』



(財) 荘内南洲会によって昭和 51 年 (1976 年) に創建された南洲神社。酒田市飯盛山下にあります。上下写真とも、2010 年 3 月撮影。



南洲翁と菅臥牛翁が対話している『徳の交わり』像。鹿児島市武町の西郷屋敷跡にあるものと同じものが平成 13 年 (2000 年) に建立されました。



西郷隆盛直筆の書展示室と（財）荘内南洲会理事長の水野貞吉さん。
2017年6月荘内南洲神社で撮影。



荘内南洲神社のパンフレット、年4回発行の機関誌『敬天』
2017年6月荘内南洲神社で撮影。

— 西郷隆盛(南洲)翁の肖像画 —



2017年6月 荘内南洲神社で撮影

寄贈者：
石川新氏（石川静正の曾孫）
平成25年11月21日

この肖像画は、荘内藩士・石川静正（1848～1925）によって描かれたものの複製（写真）である。石川静正は、明治3年に約5ヶ月半、明治8年に約20日間、訪鹿滞在し西郷南洲翁の教を得ており、明治8年訪鹿時に描かれたものである。西郷南洲翁の『武屋敷』の写生も行っており、画人としても著名である。（写真・文とも荘内南洲神社）

りました。』とあります。

南洲神社は、（財）荘内南洲会により、南洲会館、南洲文庫と共に運営され、南洲翁に関する遺墨、遺品、研究資料を始め、明治維新関連資料や庄内出身の偉人傑士の書画などを数多く収蔵しています。（財）荘内南洲会は現在会員が約四五〇名。『南洲翁遺訓』をはじめ、論語や人間の道を求めた古聖賢の教えなどを学ぶ『人間学講座』の開催（毎月第一土曜日の午後二時より四時まで）、機関紙『敬天』の年四回の発行、西郷南洲翁の生まれた鹿児島、活躍した薩摩、流島された島々、西南戦争の舞台となった熊本・人吉・都城・城山等々を中心に訪ねる旅などの活動が現在も続けられています。

（元九州職業能力開発大学校教授）